

## 沖縄文化研究所の設立縁起

|     |   |
|-----|---|
| 著者  | 中村 哲  |
| 雑誌名 | 沖縄文化研究  |
| 巻   | 12  |
| ページ | 375-380   |
| 発行年 | 1986-03-13  |
| URL | <a href="http://hdl.handle.net/10114/00015624">http://hdl.handle.net/10114/00015624</a> |

## 沖縄文化研究所の設立縁起

### 1

中村 哲

一九七四年に「沖縄文化研究」第一号を発刊するに際して、沖縄文化研究所の設立趣旨と将来の抱負について、私は、その冠頭の文章を記した。当時の大学の経営事情からして、この種の研究所の設立には、消極的とならざるを得なかったので、沖縄関係の資料の寄贈を理由として「世界のなかのアジア文化研究の一拠点とした南方文化研究を進め」という名分で理事会の了解を得た。直接の動機は中野好夫氏による「沖縄資料センター」が沖縄の祖国復帰と共に廃止されることになり、その資料の保管をひきうけることにしたことであった。資料の蒐集は今後は現地においても可能となるであろうから、研究機関として再出発することを考えた。中野氏は学術研究をすることを望むのではなく、資料の保管を続けてほしいということであったが、大学の付置機関としては研究に重点をおく以外では了解されることがむづかしかった。ことに中野氏は、政治関係や社会関係を中心として、センターのスタッフも引き受けてほしいということも私にいわれたが、沖縄の研究に政治色がからむ可能性があり、法、経、社会等の学部を持っている大学としては、大学紛争時ではあり、慎重とならざるを得な

かった。それで、文学部において外間教授によって開講されていた沖縄言語研究の実績があるのをふまえて、これをひろく文化関係に拡大することにした。戦後、沖縄出身の学生諸君が郷土研究のためにも集ってくる文学部の特徴があった。一大学の研究所がなぜ特定の地域文化を対象にするのかと学園の内外において言われたこともあるが、ただ沖縄に限定することではなく、ひろくアジアの南方研究の礎石とする考えであることをうたい、これを冠頭の辞としてかかげたのである。

沖縄のように、国際、国内の政治の焦点となる地域の文化研究は厳正でなければならず、その上、一たび発足すると大学付置の研究所であるから、研究の自治が要望されるので、政治色のない文化を中心とする研究機関であることを明確にする必要があった。しかし、「沖縄資料センター」の果してきた祖国復帰の精神を継承・発展させることは当然であった。たまたま、大学紛争の最中であって、資料の蒐集が諸大学の学生など若い人々の協力によって行われていたために、一大学にもって来ることにについて少からずトラブルがからんだので、移管に反対して、自分たちの手におくことを要求した図書、資料類のすべては、その人々の希望に応じて、移管の処理をするほかはなかった。このため資料センターから引き継ぐことになったのは、主として新聞類ということになり、そのほとんどが法政大学の手で図書類を再蒐集するという必要を生じた。これらの移管事務と対外折衝は一切、外間守善教授に一任して、年余に及び発足にたどりつくことができた。学内においても、必しも理解があったわけではないので、この際、なみなみならぬ同教授の労苦に感謝したい。沖縄資料センターを独力で

つづけられた中野氏の誠意には賞讃を惜しまないが、沖縄文化研究所の設立にまで漕ぎつけたのは、外間教授あってのことである。そして客員・委託・地方研究員という形で現地研究者の支援を可能としたのも氏の力による。これによって、本土に稀覯図書を含む資料を保存することが可能となったのである。私はこれに加えて、民俗資料をも保存することができればと考えたことがある。しかし、そこまで手をひろげるに至っていない。私はこの機会に、本土の側から知る沖縄研究と祖国復帰等について一、二のことを記録しておきたい。

2

私が外間教授と出合うことになったのは、山之口獏さんの「定本・山之口獏詩集」の出版会においてであった。かねてから、仲原善忠先生の「おもろ」研究会が、先生の自宅でつづけられていたとき、この会を支えてきた少壮の学者として氏のことは聴いていたが、偶然にも、法政大学において会することができたのも奇縁である。仲原先生の「おもろ」研究は、先生が成城学園の騒動の一方の旗頭であり、玉川学園に移った小原国芳校長と、教育と経営の方針について対立し、小原派、仲原派という紛争が泥沼化し、年余に及んだが、方向としては仲原支持で收拾されることになった。しかし喧嘩両成敗ということで、仲原さんも成城学園を去ることになった。私はたまたま中学時代の全期を通じて、仲原先生がクラス主任であった上に、歴史好きであったため個人的な交渉が深かった。私が東大

の研究室にあった時、小田急でばったり顔を合わせると、近頃は「おもろ」の研究を自宅ではじめていると先生はいわれた。仲原善忠選集を開いてみれば、これらの事情はいくらか分ることである。

私は戦前、台北帝大に職を奉じていた時、この土地には旧制の台北高校の製図の教授であった須藤利一氏が中心となり、南方の土俗の研究雑誌を出しており、地域が隣接していることもあって、台北は沖縄研究の専門者を多くかかえている土地柄であった。しかし大学の土俗学研究室は高砂族の研究に集中していたために、漢民族文化や沖縄の地域文化の研究の方は雑誌「民族台湾」などを主宰していた医学部の金関丈夫教授を中心として進められていた。

私が戦争中から、畫家の南風原朝光氏を知っていたのも、そのために、私は戦後一週に一ぺん顔を合わせていたのはこの畫家の家と郷土飲食店「おもろ」の主人である南風原英佳氏である。池袋の立教大学に講義に通っていた時期があった。私はこうして自然に東京における沖縄関係の人々の文化的動きに触れることができた。実際の復帰運動に専心していたのは後者の南風原氏で、この人々によって、一九五七年七月四日、日比谷公園の野外新音楽堂で「沖縄問題解決国民総決起大会」を超党派で、はじめて開くところまでこぎつけた。「施政権返還」、プライス勧告反対、沖縄四原則貫徹等のスローガンをかけ、当日の朝日新聞夕刊によれば集まるもの六千人といわれている。現地報告は沖縄民主党新里善福、社大党安里積千代、議員代表知念朝功、真和志市長翁長助静、沖縄青年連合事務局長仲宗根悟、教職員会長屋良朝苗、婦人代表仲井真八重子、これに自民党の高岡大輔、社会党

の鈴木茂三郎が応援に参加した。これが當時では可能だったぎりぎりの民主勢力であった。私はこの時文化人代表として議員団に加わった。この大会の準備は池袋の映画館の屋根裏を貸りていた南風原朝光氏と南風原英佳氏に加えて山之口獺氏がお膳立てをして、私も加わって、日比谷新音楽堂の掃除から飾り付けまでやったのである。

安里氏は上京することがこの時はじめて許可されたが、それより左とみられる人々は本土への渡航をゆるされなかった。それで、一九五九年には、さきの集成刑法の大幅な改悪が行われたので、これらのことを米本国政府と国連に働きかける対策をたてた。自由人権協会の日本支部は海野晋吉会長、森川金寿事務局長の働きかけで、国連加入の非政治的団体として認められている世界人権協会のポールドウィン会長に連絡をつけ、沖縄の人権問題を世論にさらすことができた。私は当時関係した一人ではあったが、五八年十一月、周恩来首相の招きで片山哲氏一行に加わって、中国行の途次、那覇に飛行機は立ち寄った。あらかじめ連絡しておいた空港の待合室にも接近することもできず、現地の人々とはただ手を振り合った。それが誰であったのかは確認するすべもなかった。私は翌年は大学の海外出張で一年間空白となったので、詳しいことは知らないが、沖縄資料センターが岩波書店の緑川亨氏らの肝入りで、かねてから、沖縄問題にかかわりのある中野好夫氏の私財により発足したのはこの一九六〇年のことである。その後、自由人権協会が現地の調査を企てたけれども、人権協会の代表の渡航を国防省すじはみとめず、国務省がはじめて許可したのは、刑法学者として新人であった法政大学の

吉川経夫教授を団長として、大野正男氏を副団長とする人権協会の調査団であった。この頃から沖縄の施政の実情は、国際的な世論の下に立たされることになった。

3

なお、末筆になるが、ここで中野好夫論をするということになれば、私は文学関係の知己が多いが、卒業年次の関係からいって、中野教授に教えをうける年令ではなく、私より後の木下順二氏からがその最初の弟子であった。そのことは「英語青年」の中野好夫氏追悼号に詳しい。政府の憲法改正のための憲法調査会に対抗して大内兵衛先生を代表として憲法研究会の例会を毎月持つて集っていた数年の間は、先輩格の中野好夫氏はほとんど、一回も欠かすことなく出席されたので、よく、私も意見を交えた。「沖縄資料センター」の移管を私にもち出されたのも、この席上であって、引き受ける方向を出してから、さきのように学生紛争もからんでなかなか解決せず、難産のすえ、法政大学に移管することになって、今日その遺業が継承されていることは幸である。

中野さんの病が重く、一時、小康を得て自宅に帰られた時、われわれの関係する軍縮のための二委員会に顔を出されたことがあるが、今にして思えば別れの心情もあったかに思われて、悲しい。この鋭い社会的良心を備えた異色の評論家を、われわれは今後望み得ないだけに、心惜しい限りである。